

日本語と日本文化のモノローグ的性格について

齋藤伸治

1. はじめに

今年(2011年)の3月11日に発生した未曾有の東日本大震災に際して、テレビ、新聞、雑誌などでは、日本人の他者を気遣い、思いやる姿が連日のように伝えられた。被災地の復興のため、命がけで災害支援活動を行う自衛隊や、無私の奉仕にいそむ多くのボランティアの人々の姿、そして自分自身も肉親や子供を亡くすという苦境にありながらも、まだ他人を思いやる気持ちを持ち続け、周囲からの援助に対する感謝を忘れない被災した人々の姿。数学者の藤原正彦氏は、ある雑誌の中で次のように述べている。「今回の震災と原発事故が起きた直後に、日本中が喪に服したかのような静けさに包まれました。その後、実に多くの日本人が被災者に同情し、なんとか自分たちも助けになれないかと考えた。自衛隊や警察・消防はもちろん、ボランティアや芸能人、スポーツ選手までもが全国から被災地に駆けつけ、たくさんの義援金が集まりました。その様を見て、私は改めて日本人の中に弱者への気遣いと思いやり——一言で言えば「惻隱の情」というものが残っていたことに、感動を覚えました。それも、「まだあった」どころの騒ぎではない。今まで一体どこに隠れていたのかと思うぐらい、溢れるような同情心が、日本中を覆い尽くしました。これはもう、日本人のDNAに「惻隱」というものが染みついているとしか思えないほどでした。」(『SAPIO』2011年8月17日・24日合併号)。このような意見に対して、同じような思いを抱く日本人も、実際に多いのではないだろうか。しかしながら興味深いことに、同時にまたその一方で、日本人には同情心がない、日本人はひとりよがりである、といった指摘があることも事実なのである。山本七平氏はその著書『比較文化論の試み』(1976)において、太平洋戦争の敗因などについて論じた小松真一『虜人日記』(1975)に触れながら、その中で敗因の1つとして指摘されている「日本人はひとりよがりで同情心がなかった」という点について議論している。この場合の「同情心がなかった」というのは、他者に対して冷淡であるとか思いやりの気持ちに欠けている、といった意味では無論ない。次節以降で詳しくみていくように、客観的に他者の立場になってものを考え、情勢を判断するということが日本人には非常に不得手である、ということなのである。

では、そうなると日本人は、言葉の真の意味において、他者に対して「同情的」とは言えないということになるのだろうか。また、そもそも日本人の他者に対する態度は、例えば英米などの西洋人と比較してみた場合、どういった特徴がみられるのだろうか。さらに、言語の構造とその民族の行動様式や社会システムとの間に何らかの関係が存在するという考え方が正しいとすれば、そういった日本人の行動に動機づけを与えていると思われる日本語の言語的特徴とはどういったものなのだろうか。本稿では、以上のような問題を中心に考察を進めていきたいと思う。

2. 日本人には同情心がない

山本(1976)が「日本人には同情心がない」と主張する場合、上でも触れたように、他者に対して冷淡であるとか、思いやりの気持ちに欠けるとかといった意味ではない。例えば山本は、一見すると同情心に見える典型的な「日本的な親切」の例として、有名な新約聖書学者であった塚本虎二氏の次のような話を紹介している。塚本氏が若いころ下宿していた家の老人は非常に親切な人で、ヒヨコを飼っていたそうであるが、ある冬の日にあまりに寒かろうと思って、お湯を飲ませた。その結果ヒヨコはみな死んでしまった、という話である。この話に表れているように、「日本人の親切」というのは、自分の感情を相手に移入してしまうものであり、そこにいるのは相手ではなく、自分自身なのだ、ということである。自分は水を飲むのは冷たいからいやだ、きっとヒヨコもいやだろうと勝手に感情移入する。自分の感情を相手に移入し、それを充足させ、それで相手への同情とみなしてしまうのである。それはもちろん、純粋に相手の立場に身を置いたものではないわけであって、山本は次のように主張している。

(1) 同情っていうのは、英語ではsympathyであり…これは絶対1人じゃないんです。相手のとの話し合いで向こうがこうしてくれと言ったらその通りにしてやる。まあヒヨコがお湯を飲みたいと言えばお湯を飲ましてやる。そうじゃない場合、いきなり自分が相手の立場に立たない。これが日本人には非常にできにくいんです。(山本(1976:22-3))

山本(1976)で取り上げられている小松(1975)の「日本人はひとりよがりな同情心がなかった」という指摘は、太平洋戦争の敗因の分析の中で挙げられたものであった。そして実際に、戦争のような一つの極限的な条件の下では、その民族的特徴が比較的ストレートな形で現れやすいのか、これまで戦時中の日本軍の特徴的行動として指摘されてきたさまざまな例は、そういった観点から説明できる場合が多いように思われる。例えば、会田雄次氏は、あるアメリカ人の「日本人というのは、ふしぎな人種である。わたしたちが、日本人の戦う姿勢というものを頭の中に思い浮かべたとき、必ずそれはうつ向きの姿をとって目にうつる」という言葉を引用しつつ、次のように述べている。「考えてみると、わたしたち日本人の闘争姿勢は、たしかに極端なうつ向きである。たとえば、突撃でも、日本人はどううつ向いて銃を構え、伏せるように突っこんでいく民族はいない。それに比べればヨーロッパ人の突撃は直立に近い」(会田(1972:8))。つまり、西洋人は相手、敵をしっかりと正視するが、日本人はしない。会田(1972:24)によれば、日本の第二次世界大戦の戦術を実見した英米の戦術家のほとんどに共通した驚きがあったという。それは、4年間も戦闘を経験しながら、日本軍隊の戦術は戦争の初めから終わりまで少しも変化がなかった、ということである。何度負けても、その負けた戦法でしかやってこない。戦闘に負けたことから戦術的に何ら教訓を得ることはなかった、というのである。英米の軍隊であれば、こういった戦術を採った場合に相手はどう出るかを考え、相手や状況の変化を見据え、それに応じて戦術も変わってくる。日本の軍隊にはそれがまったくない。「外を見てないから、…『いくとなったらどこまでもいくさ』式でのみ前進する」(会田(1972:27))という自己満足な精神論なのである。確かに、NHK取材班編(1995)など太平洋戦争の敗因について分析したものを読んでいて感じることは、日本人は、この戦争において「やるだけのことはやった」式の自己満足に終始し、自分の戦術が対立する相手、敵にどのような効果が及ぶかについて

はあまり関心がないようにみえるということである。こういった姿は、まさに日本人の相手の立場に立ってものを考えるということが不得手であること、あるいはもっと言えば、日本人にとってそもそも真の意味での他者というものが不在であるということ、よく示しているように思われるのである。

このような日本人の姿は、実は、特に戦争時に限られたことではない。戦後の国際協力の問題などにおいても、日本人は金を出す、相手が本当に何を望んでいるのか聞こうとしないし考えてもいない、といったような海外での不評は、実際よく耳にする話である。例えば、山本も次のように述べている。

(2) 私自身覚えがあることですが、フィリピン人が言うには、日本人というのはアジアの解放とかなんとか言ってやってきたが、だれ1人「あなたたちのために私たちに何かできることがありますか」と聞いた人間はいないというんです。他人のために何かしてやってるつもりなんですけど、そのような聞き方をしない。ある韓国人にこの前会ったときも同じことを言われたんです。韓国の民主主義を心配するって言う。しかし、そのためにわれわれは何をしたらいいですかということ日本人は絶対に聞かない。これは同情じゃないんです。いわばひとりよがりです。(山本(1976:22))

日本人はひとりよがりであり、純粋に相手の立場に自分の身を置く—つまり同情する—ということが本来的に得意ではない、というより、そもそも日本人にとって自己と対立的な他者は不在であり、相手はいわば、自己の延長なのだ。これが日本人の基本的な意識構造をなすものであり、したがってそれは他にも日本文化の様々な局面に姿を現し、日本人の行動様式に深い影響を及ぼしているということが予想される。例えばそれは、日本人が他者の言語、つまり外国語を学ぶその学ぶ姿勢にも、深く関係しているように思われる。鈴木孝夫氏は、著書『日本人はなぜ英語ができないか』の中で、外国語を学ぶ学習態度を3つの類型に分け、アメリカと中国の伝統的な外国語学習の態度と日本のそれとを比較対照させている。鈴木は、アメリカの外国語学習の特徴が「他者攻撃・折伏制御」であり、また中国のそれが「自己顕示・自己宣伝」であるとすれば、日本の外国語学習のあり方は、「自己改造・社会改革型」であると特徴づけることができる、と述べる。歴史的にみれば、日本人の外国語学習の目的は、外国の優れた文化文明を学ぶことで日本という国を改良し、同時にまた個人の人格資質を高めるということにあったのであって、つまりは内向きのものであった、というのである。

日本人のように、これまで一貫して自己改造・社会改革を究極の目的として外国語を、それもひたすら書物を通して学ぶ、こんなにも長い伝統をもち続けた民族は他にいない、という。その外国語とは古くは漢文であり、そこに江戸末期にオランダ語が加わり、明治以降になると英語・ドイツ語・フランス語となり、そして終戦後は特にアメリカ英語が中心となって現在まで続いているのだが、その間終始、自己改造・社会改革型で、内向きの外国語学習であった、と鈴木は述べている。具体的に言えば、これまでの日本の英語の教科書の内容は、英米の生活、文化、歴史であって、そうした英米の文化がいかにすばらしいかを取り上げた内容が多かった。そして、それによって英米について学び、自己改造や社会改革を行っていくために英語を学ぶということになる。しかしこのような内向きの外国語学習の姿勢というのは、実は世界の中ではむしろ稀な、日本に特徴的なものであり、例えば自己顕示・自己宣伝型とされる中国の伝統的な外国語教育は、徹底的に外向きである、という。自己顕示・自己宣伝型の外国語教育というのは、「外国語を学ぶ主な目的が、相手国を知ることよりも、学ぶ自国民に自分たちの国がど

んなによい国が、いかに偉大で光輝に満ちた長い歴史をもっているのかなどを自覚させ、それによって自国に対する愛情と誇りをもちたせることに向けられているもの」(鈴木(1999:36))である。例えば中国のロシア語教育では、教科書で取り上げられている題材は、ロシアの歴史や文化を扱ったものではなく、『毛沢東語録』をロシア語に訳したもの、あるいはその他には、中国の国土の広さや歴史の古さといった、要するに中国がいかに偉大で素晴らしい国かといった事柄が中心であった、という。つまりこのように、中国における外国語学習は、誇示宣伝のためのものであり、明らかに完全に相手を意識した学び方、外向きの学習姿勢であると言える。もう1つの外国語教育の類型とされる他者攻撃・折伏制御型のアメリカの外国語教育もまた、相手あるいは敵を意識した非常に外向きのものであるとされる。例えば日本語教育であれば、教材としては、日本の文学作品や社会・文化に関するものが多く取り上げられ、相手の事情を学ぶという点では日本の外国語教育と似ているが、学ぶ時の基本的姿勢が日本の場合とは正反対である、という。つまり日本人の場合は一貫して受身的で受容的なのに対し、アメリカ人の日本語を学ぶ態度は攻撃的である、という。「自分たちのもつ考え方、生き方、文化や宗教のすべてを普遍的で正しい基準と考え、自分が理解できない異質の考えや生き方などに会おうと、それをただちに攻撃」(鈴木(1999:34))する姿勢—これがアメリカにみられる他者攻撃・折伏制御型の外国語学習の姿勢とされるものである。

以上のように、アメリカの場合も中国の場合も、外国語教育の目的は、相手(外国)をどう動かすか、どう対処していくか、といった外向きの関心が主となっていることになる。しかし日本人の外国語学習の姿勢は、それらとは正反対である。鈴木は次のように述べている。

(3) 日本人の外国語学習の場合は、習得した外国語を使って相手をどうするのかという視点、つまり他者にどう働きかけたらよいかを考える姿勢が全く欠如している…。相手がそもそも念頭にないといってもよいかもしい。 (鈴木(2008:198))

アメリカや中国とは対照的に、日本人の外国語学習の目的には、相手をどうしようという構えが全くない。相手という意識すらも欠けたままなされてきたのが日本の外国語教育だった、というわけである。¹⁾

鈴木はまた、このような外国語学習の態度の基本的理念は、「間接的文化受容」(増田(1967))という世界の歴史においてほとんど類例のない非常に例外的な形での外国との接触形態を、6世紀の末から約1,400年の長さにもわたって維持してきた日本の特殊な事情に由来しているのではないか、ということを描きしている(鈴木(1999:26))。「間接的文化受容」というのは、外国とほとんど直接に交流することなく、主としてもの言わぬ文献(文字言語)などを通じて、外国語を学び、外国文化を取り入れていくということである。これまでみてきたような日本人に特徴的な外国語学習、つまり相手という意識の欠けた外国語学習は、確かに、このもの言わぬ文献中心の外国語学習の歴史的結果ということで説明できるのかもしれない。そして、相手のいない文献が中心の文化受容であれば、どうしてもその理解の仕方は、鈴木(2006)などで「蜚語効果」と名付けられているように、しばしば相手、外国の現実の姿というよりもその理想

1) このような「相手を対抗者、敵対者として考えずに、こちらを改革することだけ考えてきた学習態度」こそが、日本の外国語教育、英語教育を考える上で一番大きな問題だったと、鈴木孝夫氏は述べている(鈴木(2011:73))。また鈴木は、これからの日本の外国語教育が採るべき道は、中国のような発信型であるべき旨を主張している。

化された姿、つまり自分がこうあってほしいという姿を見ている、ということにつながってくるわけであろう。

以上みてきたような、真の意味での他者というものの不在という特徴は、日本人のひとりよがり、同情心のなさや外国語教育の基本的な姿勢など日本人のさまざまな行動様式にみられる、日本人あるいは日本文化のもつ基本的特徴となっているように思われる。そしてこれはまた、次節でみていくような、日本語の基本的特徴をなすとされる「モノローグ的性格」(池上(2004, 2007) など)とも深いつながりをもっていると考えられる。

3. 日本語のモノローグ的性格

言語は、その民族の文化や社会システムや行動様式と深いかわりがあるとされ、実際、これまでもある民族の文化的特性などを説明するのにその言語的特徴を拠り所とする、といったことがよく行われてきた。廣瀬・長谷川(2001a)でも指摘されているように、言語と社会の研究はお互いに深く結びついており、日本語は特に、そういった観点からもっとも広範に研究されてきた言語の1つであったと言える。

それでは、第2節でみた日本人の「ひとりよがりでは同情心がない」といった行動の背後にあると考えられる日本語の言語的特徴として、どういったものが考えられるだろうか。結論的に言えば、それは、池上(2004, 2007)などで議論されているような、日本語にみられる「モノローグ的性格」であると思われる。²⁾池上(2007)によれば、モノローグ的性格というのは、コミュニケーションにおいて話し手が聞き手の側で理解への最大限の努力をしてくれることを当然の前提として、あたかも対話の相手が存在しないかのように、多かれ少なかれ自己中心的に振る舞うというあり方である。池上は、日本語の談話はこのモノローグ的な性格を多く帯びている言語であるとし、相手への働きかけという側面がしばしばいかにも稀薄にみえると述べている(池上(2007:290))。このモノローグ的な特徴というのは、第2節でみてきたような、日本人が他者の立場に身を置くことの不得手であるということ、そしてそもそも働きかけるべき相手の不在であるということと、ぴったりと符合する。それに対して、英語のような言語は、コミュニケーションにおいて話し手と聞き手の関係が対等であり、話し手は聞き手の側の十分な理解に配慮しなければならないという、ダイアローグ的な傾向の強い言語であるとされる。

モノローグ的な言語的特徴というのは、典型的には、話し手、つまり1人称に対する強いこだわりとなって現れる。つまり、モノローグ的な言語では、1人称が他の人称と比較して圧倒的な優位性を示すが、それに対して、ダイアローグ的な言語では、対話の相手である2人称が1人称と同格だったり、あるいはむしろ2人称の方に優位性がみられたりする、ということになる(池上(2004:16-7)参照)。例えば、日本語における「行く」と「来る」、英語のgoとcomeの使い分けに、それはよく表れている。池上(2007:306-10)などで指摘されているように、日本語では、「来る」は基本的に1人称、つまり話し手のいる方向への移動、「行く」は基本的に2人称と3人称、つまり話し手以外のいる方向への移動という形で対立する。それに対して、英語では、comeは基本的に話し手である1人称だけでなく、聞き手である2人称のいる方向への

2) 荒木(1994)においても、日本語が「モノローグ言語」と特徴づけられている。「日本語は対話においてもほとんど他者を想定しない、否、対者も他者も環境をも意識しないきわめて独自のあり方を示す言語である」(荒木(1994:43))。

移動をも表し（(4)を参照），goは話し手及び聞き手以外，つまり3人称のいる方向への移動を表すことになる。

(4) “Maria, would you come here, please?” “I’m coming.” (Swan(2005:109))

つまり，日本語では「話し手 対 それ以外」という形で対立しているのに対して，英語では聞き手に対しても話し手と対等の位置づけを与えられており，「話し手・聞き手 対 それ以外」という対立が基準となっている。このように，日本語はモノローグ的な様相を，英語は一話し手と聞き手は対等な関係であり，コミュニケーションにおいて相互に役割交替を行う存在であるというダイアローグ的な様相を示す言語であるとされるわけである。あるいは英語では，話し手よりもむしろ聞き手の方に優位性が置かれるようにみえる場合もある。例えば，日本語の「私とあなた」に対して英語ではYou and Iとなる³⁾，他にも，日本語では1人称が主語であるところを，英語では2人称を主語とする表現になるような場合が，非常に多い(例文は，吉川(1995)より引用)。

- (5) a. それをあげますよ / You may keep it.
 b. これはサービスとなっております。 / You can have it free of charge.
 c. おかげさまで（私は）助かりました。 / You were helpful to me.
 d. これは参った。 / You've got me there.

日本語において1人称（話者）だけが別格となるのは，ほかに例えば次のような（感覚・感情・思考など）内的な心理的状态を表す心理述語に示される。以下の例(6)-(9)にみるように，日本語では，1人称の場合とは異なり，他の人の内的状態を表す場合には，その情報の拠り所を示す「証拠標識」evidential markerなどが必要とされる。

- (6) a. 私は寒い。
 b.*彼は寒い。
 c. 彼は寒がっている。 / 彼は寒そうだ。
 (7) a. 私はうれしい。
 b.*彼はうれしい。
 c. 彼はうれしそうだ。 / 彼はうれしがっている。
 (8) a. 私はコーヒーを飲みたい。
 b.*彼はコーヒーを飲みたい。
 c. 彼はコーヒーを飲みたそうだ。彼は飲みたがっている。
 (9) a. 私は，彼女が病気だと思う。
 b.*彼は，彼女が病気だと思う。
 c. 彼は，彼女が病気だと思っている。

3) これは，単にダイアローグ的な性格によるものというよりも，それ以上の要因が働いているからではないか，と池上(2004:17)では述べられている。つまり，対話の相手に対する配慮，相手を先に立てるということであって，丁寧さということが関係しているのではないか，ということである。

英語では、このような場合、日本語と異なり、1人称だけが特別扱いされるということはない。

- (10) a. I am cold.
b. He is cold.

以上のように1人称への強いこだわりを示すモノローグ的性格の強い日本語はまた、コミュニケーションにおいて、自己中心的に振る舞う傾向が高く、日本語のコミュニケーションにおける省略の許容度の高さ、つまり話し手が分かっている限りは特に言語化する必要はない、という日本語の特徴ともつながっていると考えられる(池上(2007:311))。またこのようなモノローグ的な傾向を強くもつ日本語は、自己本位的で、あたかも他者を想定していないかのような振る舞い方をする言語ということになるが、このような言語的特徴は、第2節でみてきたような「日本人はひとりよがりて同情心がない」という日本人の思考様式・行動様式ともよく合致しているということになるわけである。

しかし一方では、日本語には、次節でみていくような、相手や状況との関係で可変的な日本語の「人称代名詞」、特に話し言葉において聞き手に対する発話態度を示す終助詞の義務性、さらには日本語の中核をなすと考えられる敬語体系など、相手や状況に配慮した言語的特徴が豊富に存在することも事実である。そしてさらに重要なことは、このような言語的特徴は、日本人の自我意識の稀薄さ、また「日本人は集団主義的である」という伝統的な日本人観に対して1つの裏付けをあたえてきたものである。日本人の自我が稀薄であるとか、日本人は集団主義的であるといった考え方は、もちろん日本人はひとりよがりて同情心がないという考え方は、相容れないもののように思われる。したがって次節では、この「日本人＝集団主義的」という伝統的な日本人観が本当に妥当なものなのかどうかについて、それを言語学の立場から再検討している廣瀬・長谷川の研究を中心にしてみたいと思う。

4. 廣瀬・長谷川：日本人は集団主義的ではなく個人主義的である

第2節でみてきたような「日本人はひとりよがりて同情心がない」という考え方は、これまで伝統的に受け入れられてきた日本人観である「日本人は集団主義的である」という考え方—つまり和を尊び、自己よりも他者あるいは自己の属する集団を優先するという考え方—とは、あまりなじまないように思われる。あるいはむしろ、日本人は同情的であるという一般的に抱かれてきた見方こそ、この根強く存在してきた伝統的な集団主義的日本人観と密接なつながりをもっていると言えるだろう。

しかし、ここ2、30年くらいの間に、この「日本人＝集団主義的」という伝統的な日本人観そのものを見直し、それに異を唱える研究が心理学、教育学、経済学、言語学などさまざまな分野において陸続と現れている(詳しい状況については、高野(2008)を参照のこと)。その中に、言語学の立場からこの日本人＝集団主義的に異を唱え、日本人の個人主義的傾向を主張している研究として、廣瀬・長谷川(2001a, b)がある。これまで一般に日本人論・日本文化論を述べる場合、その言語的特徴、つまり日本語の言語的特徴をもとに議論されることが多かった。「日本人＝集団主義的」の場合も正にその通りであって、日本人の集団性、つまり他者との関係の中でのみ成立する相対的で流動的な自己、自分が所属する集団(ウチ)と融合する自己といった考え方を示唆するように思える日本語の言語現象は、前節の最後でも触れたように、実際の

ところ数多く存在するし、特に集団主義と不可分の関係にあるウチとソトの概念によって日本語を分析する研究も多い(例えば、牧野(1996)など)。本節では、このような考え方に対して「そのような現象の背後に、実は、英語などの西洋語以上に、個の意識に根ざした言語体系が存在する」(廣瀬・長谷川(2001a:87))とする廣瀬・長谷川の主張をみていくことにする。

まず、「日本人=集団主義的」の論拠とされてきたものは、どんなものがあったのだろうか。ルース・ベネディクトの『菊と刀』(1946)に始まり、戦後さまざまな日本人論が現れ、また日本人の日本人論好きという性格とも相俟って、数多くのベストセラーも生まれた(例えば、中根(1967)、土居(1971)など)が、そのほとんどはこの「日本人=集団主義的」という認識に基づいている。荒木(1973)など、この「日本人=集団主義的」を軸にした日本人論も多い。ルース・ベネディクトの『菊と刀』は、西洋文化の「罪の文化」に対して、日本文化を「恥の文化」と位置付けたが、これは、日本人は個我が確立しておらず、つねに他者の目を意識して行動するので、恥ずかしくないかどうかが行動を律する原理になる、ということになる(高野(2008:9))。また中根(1967:30)は、他人に対して自分を社会的に位置づける場合、記者であるとか、エンジニアといった個人の資格よりも、まずA社、S社の者というようにその人が属する場であるということを指摘しているが、これは日本人の集団帰属意識の強さを示すものである。また土居(1971)でも、個我が確立していないので、日本人の人間関係が甘えやもたれあいの関係になってしまう、ということが論じられている。

このように、一般的に従来の日本人論では、日本人は集団主義的な民族と見なされており、日本語もこの日本人=集団主義的という見方を動機づけていると思われる事例に富んでいてとされてきた。まず日本人の自我意識の稀薄さを示すものとして、よく採りあげられるのは、鈴木(1973)などにおいて指摘されている、日本語には西洋語に相当するような「人称代名詞」が欠如しているという事実である。日本語に英語のIに相当する固定した1人称代名詞がなく、聞き手や状況に応じて、例えば学校の教師であれば、「はく」(同僚に対して)、「わたし」(校長先生に対して)、「先生」(生徒に対して)、「お父さん」(自分の子供に対して)などに使い分けられるという事実は、日本人の自己が他者との関係でのみ成立し、日本人の自己意識の流動性を示すものとされ、しばしば日本人は集団主義的な民族であることの証拠とされてきた。例えば、荒木(1973:119-20)は日本人の「自我の不在」ということに言及し、次のように述べている。

(11) この自我の不在をもっとも端的に裏付けているものは、日本語に自己を指示する1人称代名詞が多く存在するという言語的事実である。印欧語にあっては、1人称代名詞は英語のI、ドイツ語のichのように原則としてただひとつであり、文中にあって省略されることがないのに対して、日本語にあってはその性別、年齢、社会的ステイタス、対話の相手、あるいは心の動きなどによってつねに可変的であるばかりでなく、文中にあってもまったく省略されてしまう例の多いのも、日本人の他律性に関わる自我の不在と、決して無関係ではないと思われるのである。

日本語が相手の存在や状況というものに敏感であることを示す例としては、他にも例えば、話し言葉では必ず終助詞がないと文が終わらないという日本語の特徴によく表れている。他者との対人関係を示すマーカー、すなわち終助詞がないような表現、例えば(12a)のような文は、話し言葉としてはやはりかなり親密な相手以外では使わないだろうし、話し言葉では、常に相手との関係性を合図する終助詞が義務的である。

- (12) a. 今日は暑い。
b. 今日は暑いね。 / 今日は暑いよ。 …

このような関係性の重視を示すものとして、日本語の敬語の発達などはその典型的なものであろう。しかし、フランス文学者・哲学者であった森有正氏が強調するように、日本語の表現は、敬語表現であるなしにかかわらず、すべて相手との関係を意識したものとならざるを得ず、客観的・中立的な表現は極めて困難であると思われる。「これは茶碗だ」という表現は親しい相手以外には使わないだろうし、自分と相手との関係—親疎の度合や上下関係など—に応じて「これは茶碗です」「これは茶碗でございます」という具合に、必ず相手を意識した言い方になるのである。それに対して、英語のThis is a cup. は、相手や周囲の状況とは全く無関係に用いられる比較的客観的で中立的な表現である、と森は述べている（森(1982:204)）。

授受動詞の使い方にも、日本人の自己が自分の所属する集団と一体化しているということ、つまり日本人の自己意識の稀薄さ・流動性をみる研究者が多い。授受動詞というのは「くれる」「あげる」といった動詞を指すが、「くれる」は、(13a)にみるように他人が話し手に対して行う行為に用いられるのに対し、(13b)にみるように他者に対して行われる行為には用いることができない。ところが、(13c)のような表現が可能であるということは、「母」が他人ではなく、話し手の、いわば延長された自己（ウチの者）とみなされているからであり、これは自己と他者との境界線が流動的であるということ、つまり日本人の自己意識の稀薄さを示しているということになる。

- (13) a. 岡田さんは（私に）お金を貸してくれた。
b.*岡田さんはあの見知らぬ人にお金を貸してくれた。
c. 岡田さんは母にお金を貸してくれた。

（廣瀬・長谷川（2001a:90））

同じように、次のような尊敬語と謙譲語の使い分けにも、このウチとソトの区別が関わる自己の流動性がみられる。

- (14) a. 社長は出席なさいます。
b. 私は出席いたします。
c. 田中は出席いたします。

（廣瀬・長谷川（2001a:90））

自社の社長の予定を同僚（ウチの者）に話す時には、(14a)のように尊敬語が使われる。また自らの予定を話す場合は、(14b)のように謙譲語が使われる。しかし、自社の社長の予定を他社の者（ソトの者）に話す時には、社長（田中）について話す時にも、謙譲語が用いられる。これはソトの者との会話では、社長も自分のウチに入る、つまり自己の延長とみなされるからであるとされる。

このように、日本人論や日本語論の世界では確かに、日本人は自己意識が弱く、集団帰属意識が強そうに思われるような事実が数多く存在している。しかし、上でも述べたように、ここ2,30年の間に、この「日本人＝集団主義的」という日本人観が現実とは一致しないということを主張し、日本人はむしろ個人主義的傾向が強いのではないかという実証的研究が、さまざま

な学問領域から出ている（例えば、山岸(2002)、高野(2008)など）。そして言語研究の立場から、廣瀬・長谷川(2001a, b)が、日本人＝集団主義的のモデルは日本語の本質的特徴とは相容れないこと、そして特に日本語には「自分」で表現される、他者から厳然と区別された絶対的の自己の存在を示す特性がある、ということ論じているのである。

廣瀬・長谷川(2001a)が挙げる証拠の1つは、すでに第3節でみた心理述語からのものである。(6)-(9)でみたように、心理述語を用いる場合には、自己と他者の間に厳密な区別がなされる。

- (15) a. 私は寒い。
 b.*母は寒い
 c. 母は寒がっている。/ 母は寒そうだ。

確かに授受動詞の場合には、日本人の自己が、集団的なウチに同化し、状況に応じて変化する相対的なものであることを示していたが、心理述語の場合には、(15)にみるように、自己と他者の間に厳密な区別がなされる。心理動詞と授受動詞とが共起する例(16)をみてみよう。

- (16) a. 私は、岡田さんが助けてくれると思う。
 b. 母は、岡田さんが助けてくれると思う。

「助けてくれる」の目的語と解釈されるのは、aでは「私」、bでは「母」である。つまり、授受動詞の表す恩恵の受け手に関しては、「私」とウチの者である「母」との間に区別はない。しかし、「思う」という心理述語の主語になれるかどうかということになると、「私」と「母」との間に区別が出てくる。aでは「私」が「思う」の主語であるが、bにおいて、「母」は、ウチのものではあっても、「思う」の主語には解されない。このように心理述語は、ウチのものを含む他者から厳然と区別される絶対的な自己の存在を示している、と廣瀬・長谷川(2001a)は論じているのである。

前述したように、英語のような言語では、話し手はつねに人称代名詞Iで表されるのに対して、日本語では、それに相当する固定した1人称代名詞がなく、聞き手や状況に応じて、「ぼく」「わたし」「先生」「お父さん」などを使い分けなければならない。しかし、廣瀬・長谷川(2001a)は、こういった事実をもとに、日本人の自己は明確に確立されておらず、状況や他者との関係に依存しているなど結論づけるのは誤りである、と論じている。廣瀬・長谷川は、話し手という普遍的概念としての自己には「公的自己」と「私的自己」という2つの面があるとし、英語などは公的自己が中心となっている言語であるのに対して、日本語は私的自己が中心となっている言語であるとする。そして日本語の「自分」は、相手や状況によって変わることなく、一貫してこの私的自己を表す言葉であるとしている。一方、聞き手や状況に応じて使い分けられる「ぼく」「わたし」などは、公的自己を表しているときとされる。公的自己というのは聞き手と対峙する伝達の主体としての話し手の側面であり、また私的自己というのは、聞き手の存在を想定しない思考・意識の主体としての話し手の側面と定義される。次の例をみてみよう。⁴⁾

- (17) a. 秋男は、ぼくは泳げないと言っている。

4) 以下の説明の仕方そのものは、より分かりやすいと思われる高野(2008:98-110)に基づいている。

- b. 秋男は、ぼくは泳げないと信じている。
- c. 秋男は、自分は泳げないと信じている。

aの文は、「ぼく」がこの文の話し手を指す解釈と「秋男」を指す解釈とで、2通りに曖昧である。これは、「ぼく」が伝達の主体である公的自己を表す表現であるということから説明できる。話し手自身も「言っている」秋男も、伝達を行う主体であるからである。bでは、「ぼく」の解釈は一義的に話し手に決まる。ここでは、「秋男」は「信じている」のであり、思考の主体である。したがって、伝達の主体である「ぼく」は、「秋男」ではあり得ず、話し手でしかあり得ないことになる。ここでcのように、「ぼく」を思考・意識の主体である私的自己を表す「自分」に変えれば、逆に話し手を指示する解釈は成り立たなくなり、「信じている」という思考の主体である「秋男」に一義的に定まることが説明されることになる。

日本語では、私的自己は、一貫して「自分」によって表される。次の例にみるように、「自分」は、「信じている」主体がいかなるであろうと、一貫して、その「信じている」主体を表すために使われている。これは英語において、伝達の主体である公的自己が、一貫してIで表されるのと、全く平行的である、と廣瀬・長谷川は論じている。

(18) {ぼく / きみ / あの人} は、自分は泳げないと信じている。

このように、日本語には私的自己を表すための固有の表現「自分」があるのに対して、逆に英語にはそのような私的自己を表すために一貫して用いられる固有の表現は存在しない。つまり、日英とも、自己を表すための、相手や状況によって変化することのない一定不変の表現が存在するのであるが、日本語の場合にはそれが私的自己の表現なのであり、英語の場合にはそれが公的自己の表現なのだ、ということなのである。廣瀬・長谷川(2001b)は、日本語に私的自己を表す固有の表現はあるのに、公的自己を表す固有の表現がないのは、日本語が本来的に非伝達的な性格をもつ言語であり、私的表現行為—つまり、第3節でいうモノローグ性—と密接に結びついた言語であることを意味する、と論じている。⁵⁾

最後に、日本人の集団性と相対的で流動的な自己という考え方を特に示唆するものとしてよく取り上げられてきた言語事実、つまり日本語の公的自己が相手や状況に応じて可変的であるという事実について、もう一度触れておきたい。その背後には、やはり根強い私的自己が存在しているのではないか、と思われるからである。この言語現象は、(11)で荒木も述べているように、「自我の不在」を示しているように見え、またこの問題をはじめて明確な形で論じた鈴木も、これを「対象(相手) 依存的自己規定」と呼んでいるように、「日本人の自己は特定の対象、具体的な相手が出現してその正体を話し手が決定するまでは、いわば座標未決定の開いた不安定な状態にある」(鈴木(1973:198))と述べている。しかし廣瀬(1997:13)で指摘されているように、次の(19a)では、本来3人称として扱われるはずの公的自己を指示している親族名詞が、日本語の方の文では1人称として認識されているということに注意したい。

5) それでは、相手や状況との関係で可変的な日本語の「人称代名詞」、話し言葉において聞き手に対する発話態度を示す終助詞の義務性、そして敬語表現など、日本語を特徴づけているとされる相手や状況に配慮した言語的表現は、どう説明されることになるのか。廣瀬・長谷川(2001b:106)は、このような表現は、「むしろ、日本語が本来的に非伝達的な性格をもつからこそ、逆にそれを補って伝達性をもたせるために存在していると考えられる」と論じている。

- (19) a. お父さんは食事の前に手を洗わないのは行儀の悪いことだと思う。お父さんはお前にちゃんとした男の子になって欲しい。
- b. *Dad thinks* it would be bad manners not to wash your hands, before dinner. *He wants* you to be a good boy.

ここでは、父親が子供に向かって話しかけているという場面設定になっている。(19b)のように、英語においても親族名称が自称詞として使用されることがあるが、日本語の場合とは明らかに異なっている。英語の例では、父親が自分のことを表すのに用いているDadは、thinksという形、またそれを受けているheという代名詞の使用からも分かるように、明らかに3人称として扱われている。しかし日本語の場合には、「お父さん」という表現で、「思う」「欲しい」という本来1人称にしか許されない心理述語の形を伴っていることから明らかなように、1人称として扱われているのである。池上(2005)は、このような日英の「自己指示」self-referenceの仕方の違いを次のように説明する。

(20) …英語の場合のように、指示対象としての<自己>が3人称として把握されるということは、<話者>が自らの視点を完全に<他者>に移してしまい、その<他者>が事実上<話者>の立場にあるものとして<自己>に言及するという構図である。そこで<話者>の立場に立つことになった<他者>は<話す主体>として新しい<自己>としての位置づけを獲得し、そのことが相対的に、本来の指示対象である<自己>に<他者>としての位置づけを課する結果となる。つまり、<他者なる自己>が<自己なる他者>に3人称で語りかけるという構図に変貌する…。これに対し、日本語のような場合は、<他者>の眼を言わば借りるだけであって、<話す主体>としての地位は譲り渡すとしても、<認知の主体>としての地位はそのまま保持し続け、完全に<他者>に<自己>の地位を譲るという域には至らない。従って、指示対象としての<自己>の方も<他者>として相対化されることを免れるわけである。(池上(2005:21-2))

池上は、日本語では、<認知の主体>の側面がもとの<話者>にとどまったままであり、<自己の他者化>が完全には遂行され得ない、という。この<認知の主体>というのは、廣瀬・長谷川の私的自己にはほぼ相当すると考えていだろう。廣瀬・長谷川は、私的自己というのは、いわば「裸」の自己であり、公的自己を表すさまざまな表現な、その私的自己に場面に応じて着せ分ける「衣服」とみなすことができると論じている(廣瀬・長谷川(2001b:109))。日本語において自称詞はいわば「衣装」ということになるが、やはりその下にはそれを支えている強固な私的自己が存在している、と考えなければならないのではないだろうか。

以上みてきたように、日本語には強固な私的自己が存在するという主張、そしてそこから出てくる日本語が本来的に非伝達的な性格をもつ言語であり、私的表現行為—つまり、第3節でいうモノログ性—と密接に結びついた言語であるという主張は、第2節でみてきたような、日本人の「ひとりよがりでは同情心がない」といった行動様式、自己を離れて客観的に相手の立場に立つことが難しいという日本人の特性に対して、強い動機づけを与えているのではないかと思われるのである。

5. おわりに

もし「同情」sympathyというものが字義通りに、対立する他者を想定し、純粋に他者の立場に立つということを意味するのであれば、日本人は、その強固な私的自己の存在のゆえに、他者に対して「同情的」となるのは不得手ということになる。そしてもし一般的に日本人が同情的であると考えられてきたとすれば、従来日本人が集団的民族であるという日本人観がほぼ常識化されてきたことと無関係ではないだろう、と思われる。確かに日本人には、表面的にみれば、同情的であり、あるいは集団的なところもあるが、その根底には、むしろ強力な私的自己が存在すると考えなければならず、日本人は純粋に相手の立場に身を置くというより、相手に自己の姿をみているのではないか—そして日本語の基本的特徴であるモノローグ的特性がその動機づけを与えている—ということ、廣瀬・長谷川(2001a, b)、そして池上(2004, 2005, 2007)などの研究をもとにしながら、みてきたわけである。

ところで、このモノローグ的な特徴というのは、典型的には子供のコミュニケーションのあり方にみられるものである。例えば、その典型的な形は、池上(2007:288)にも紹介されているような、次のような例である。

(21) 「ママ、今日、健太くんお休みだったの」「あっそう？健太くんって、誰？お友達？」

子供というのは、自分の知っていることは当然（母親など）他者も知っているはずだということを前提とするような、自己中心的な言語活動をすると言われる。つまり、自分を他者に投影してしまうわけである。そのような子供の言語活動に特徴的なモノローグ的傾向を多分にもつ日本語、および日本人の他者との特徴的な関わりは、ここ何年か発達心理学の分野で、活発に議論されてきたものの1つである「心の理論」Theory of Mindという問題とどのように関わってくるのか、非常に興味深いところである。他者の身になって考えるという心理的な営みであるこの「心の理論」というのは、人間であればだいたい4歳児以降になるともつようになるとされ、人間のコミュニケーション行動にとって決定的に重要なものと考えられているわけであるが(Tomasello (1999)など参照)、この営みが行われる規模や範囲は必ずしも普遍的なものではなく、民族のあるいは文化的な違いがかなりみられるのではないか—これまで本稿で議論してきたことから考えると、そのように思われるのである。

引用文献

- 会田雄次(1972)『日本人の意識構造』講談社現代新書。
荒木博之(1973)『日本人の行動様式—他律と集団の論理』講談社現代新書。
荒木博之(1994)『日本語が見えると英語も見える 新英語教育論』中公新書。
Benedict, R. (1946) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Boston: Houghton Mifflin. (長谷川松治訳『菊と刀—日本文化の型』教養文庫)
土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂。
廣瀬幸生(1997)「人を表すことばと照応」廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』研究社。2-89。
廣瀬幸生・長谷川葉子(2001a)「日本語から見た日本人—日本人は集団主義的か[上]」『言語』30(1)。86-97。
廣瀬幸生・長谷川葉子(2001b)「日本語から見た日本人—日本人は集団主義的か[下]」『言語』30(2)。102-12。
池上嘉彦(2004)「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)」『認知言語学論考』No. 3, 1-49。ひつじ書房。
池上嘉彦(2005)「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)」『認知言語学論考』No. 4, 1-60。ひつじ書房。
池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫。
小松真一(1975)『虜人日記』筑摩書房。
牧野成一(1996)『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る』アルク。
増田義郎(1967)『純粹文化の条件』講談社現代新書。
森有正(1982)「言葉・経験・概念」木下順二編『森有正対話編II』191-227。筑摩書房。
中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社現代新書。
NHK取材班編(1995)『太平洋戦争 日本への敗因(2) ガダルカナル 学ばざる軍隊』角川文庫。
鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書。
鈴木孝夫(1996)『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書。
鈴木孝夫(2006)『日本人はなぜ日本を愛せないのか』新潮選書。
鈴木孝夫(2008)『新武器としてのことば』アートデイズ。
鈴木孝夫(2011)「『日本人はなぜ英語ができないか』, その文明史的考察」鈴木孝夫研究会編『鈴木孝夫の世界 第2集—ことば・文化・自然』富山房インターナショナル。
Swan, M. (2005) *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
高野陽太郎(2008)『「集団主義」という錯覚—日本人論の思い違いとその由来』新曜社。
Tomasello, M. (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (大堀壽夫ほか訳『心とことばの起源を探る』勁草書房)
山岸俊男(2002)『心でっかちな日本人 集団主義文化という幻想』日本経済新聞社。
山本七平(1976)『比較文化論の試み』講談社学術文庫。
吉川千鶴子(1995)『日英比較 動詞の文法』くろしお出版。